

ルカによる福音書8章 26-56 節 「解放の福音」

1A 悪霊の勢力 26-39

1B 対決 26-33

2B 反応 34-39

2A 病と死 40-56

1B 触る信仰 40-48

2B 恐れない信仰 49-56

本文

ルカによる福音書 8 章 26 節から、今晚の学びは始まります。イエス様はこれまで、数多くの病を治し、悪霊を追い出されました。けれども、26 節以降でルカは、二つの出来事をこれまでの奇蹟以上に詳しく書き記しています。詳しく書き記しているところに、ルカの情熱とイエス・キリストの福音を知らせる大切なことを知らせていると言えるでしょう。

前回の学びを思い出しましょう。イエス様は、神の国について種まきの譬えを語られました。そこでの大切な点は、神の言葉についてそれを尋ね求める主体性と積極性の中に、神の真理が表されるということでした。隠れている者が、そうした尋ね求める者には明らかにされるという原則です。それで弟子たちにとって大きな教訓となったのは、湖の上での嵐でありました。イエス様は舟の中でぐっすり眠っておられました。それは、この世が嵐のようになっていても、御父に対する深い信頼の中で安らぐことができる典型でありました。そしてイエスは、「向こう岸に渡ろう」と仰っておられたのです。それなのに、目に見える嵐によって心も騒がせていた弟子たちに対して、「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」と戒められたのです。

そして弟子たちは、「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。(25 節)」と言って、驚きました。イエス様が、天においても、地においても、一切の権威が与えられていると、昇天される前に弟子たちに言われたことを思い出してください。地において、その自然界に対して、私たちの主イエスは権能を持っておられるのです。このような方に私たちはお仕えています。そして 26 節からは、天においても権能を持っておられることを示します。霊の勢力に対して圧倒的な力で服従させる力です。

1A 悪霊の勢力 26-39

1B 対決 26-33

8:26 こうして彼らは、ガリラヤの向こう側のゲラサ人の地方に着いた。

「ガリラヤの向こう側」という言葉は、単にガリラヤ湖の向こう岸という意味ではありません。「ゲラサ人」とありますが、ある写本では「ゲルゲサ人」となっています。またマタイやマルコは「ガダラ人」としています。彼らが到着したところの町は、ゲルゲサというところでした。そして、ガダラはガリラヤ湖の南東にある町で、今はヨルダン領にあり、そこからガリラヤ湖を一望できます。そして、ゲラサはガダラからずっと南にある町で、今は「ジェラシュ(Jerash)」として知られています。ガダラとゲラサはデカポリスという十の自由都市に入っています。ガリラヤ湖の南東の広域に広がっている、ギリシヤ時代からの独立を保ってきた都市が連携して残っている所です。ゲルゲサはデカポリスに接している町であり、つまり異邦人が多数いる領域であったのです。ですから、イエス様はここで、ユダヤ人の多くいるところから異邦人の多くいる地域へ動いていったという訳です。

8:27 イエスが陸に上がられると、この町の者で悪霊につかれている男がイエスに出会った。彼は、長い間着物も着けず、家には住まないで、墓場に住んでいた。

悪霊につかれている男がイエスのところにやって来ました。イエス様は既に、悪霊に対してこの男から出ていけと命じられていたからです。それで、それに激しく抵抗している悪霊がこの男をイエスのところまで連れてきた、ということです。

彼の状態はとても悲惨でした。おそらく初めは、普通に人々の間に住んでいたことでしょう。けれども、どんどん奇怪なことをし始め、人々から離れて住み始め、そしてついに着物を脱ぎ捨て、墓場に住んでいました。ユダヤ人にとっては、この光景は実に陰惨なものです。死体に触れてはならない、汚れると神は律法で教えておられました。まさに、その中に住んでいました。

8:28 彼はイエスを見ると、叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのです。お願いします。どうか私を苦しめないでください。」

ここで御前にひれ伏しているのは、イエスを主と認めているからではありません。覚えていますか、ヤコブは行いのない信仰は死んだも同然と話しましたが、「2:19 あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。」と言いました。自分が底知れぬ所に送られるという恐怖からひれ伏しているのであり、悔い改めているのではありません。

そして霊においては、イエスの正体は明らかにされていました。「いと高き神の子、イエスさま」と言っています。「イエスさま」と敬称を付けているのですが、呼び捨てのほうがいいと思います。しかし、いと高き神の子であることを知っていたのです。天には諸々の天があり、最も高い位に座しておられる方の、その御子であられることを知っていたのです。御使いたちが、神の御子をよく知っていることを伺わせる聖書箇所があります。「ヘブル 1: 5-6 神は、かつてどの御使いに向かつて、

こう言われたでしょう。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」またさらに、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」さらに、長子をこの世界にお送りになるとき、こう言われました。「神の御使いはみな、彼を拝め。」それなのに、いと高き方のようになろうとしたのがサタンであり、その使いたちが悪霊どもです。

黙示録 12 章 4 節には、メシヤが現れる時に天から地上に悪霊どもが落ちてきたことが記されています。「その尾は、天の星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。」バプテスマをイエス様が受けてからサタンがこの方を誘惑しましたが、それゆえ福音書には激しい悪の勢力どもの抵抗を見ることができます。

8:29 それは、イエスが、汚れた霊に、この人から出て行け、と命じられたからである。汚れた霊が何回となくこの人を捕らえたので、彼は鎖や足かせでつながれて看視されていたが、それでもそれらを断ち切っては悪霊によって荒野に追いやられていたのである。

ここに、肉の力では霊を制することができないことをよく表しています。鎖や足枷で、この男を抑えていることはできませんでした。男は肉の中にある者ですが、霊がその肉に働いているのです。はるか昔に、ゴーストバスターズという映画がありました。幽霊たちを機械で捕まえる内容で、とても面白いエンターテイメントなのですが、ある宣教師が説教でこれは危険な考えであると言っていました。科学技術によって霊を制御することはできないのです。

今、私たちの世界には、これはとても人のやることではないと思われる残虐なことが行われています。シリアとイラクをまたぐイスラム国をしていることは、おおよそ人間ができるのか？と思われる事柄です。そして欧米の軍隊はいま、イスラム国に武力で攻撃をしていますが、しばしば言われるのは、「イデオロギーに対して武力で対応することはできない。」ということです。イスラム過激思想という目に見えないものに対して、目で見えるもので対抗しても消すことはできません。しかし、福音は目に見えない武器です。彼らの要塞をも破壊するほどに力のあるものです。あるアメリカにいる牧師は、このことを踏まえて「ムスリムに伝道してください」と教会の人々に呼びかけています。

そして、悪霊につかれたこの男の人は、このままだといつか肉体が切り裂かれて死んでしまいます。まさにこれが悪魔の行なうことです。「盗人が来るのは、ただ、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。(ヨハネ 10:10)」私たちの周りにあまりにも数多くの人が、悪魔によってこの道を歩んでいます。しかし一人一人が、神のかたちに造られた尊い存在です。

8:30 イエスが、「何という名か」とお尋ねになると、「レギオンです」と答えた。悪霊が大ぜい彼に入っていたからである。

レギオンというのはローマの軍隊の単位で六千人という意味です。イエス様が、名前を尋ねるといのは大事です。イエスが名前を聞かれたのは、真実をはぐらかすことなく、自分のことをはつきりと説明しなさい、自分はいったい何なのか述べてみなさいと命じられているからです。一対一になって、わたしと面と向って話しなさいと言われていたのです。しかし、悪霊どもは決してそれを望みませんでした。これが、悪霊の仕業です。人々を集団で動かして、自分の正体と、アイデンティティーを明かすことをさせないようにしています。

8:31 悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。

「底知れぬ所」はアブソというギリシヤ語で、七十人訳では旧約聖書の「水の深み」を示す言葉でした。創世記 1 章 2 節に、「やみが大いなる水の上にある」とあります。十戒の中にも、「上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。(出エジプト 20:4)」とあります。そこは、死者の行く陰府でもあります(ヨブ 38:16-17)。

新約聖書では、その陰府はハデスと呼ばれていますが、そのさらに奥にあるのでしょうか、悪霊どもが住む所として、底知れぬ所というものがあります。水の深みからさらに地下にあり、そこがちょうどマグマがあるように、底知れぬ所は、水の深みのさらに奥、水分のない部分を想像しているのかもしれませんが。イエス様が悪霊どもの動きとして、「汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。(マタイ 12:43)」とあります。レギオンがこの男を荒野に連れて行った、というところから同じ動きをしていることが分かります。そして、底知れぬ所から黙示録 9 章では、大きな炉のような煙が立ち上がり、いなごのようなおぞましい姿をした者たちが現れました。その毒は、さそりのようなものであり、五か月間、死を願っても死ぬことができないという苦しみを味わいます。

そして反キリストが、患難時代の半ばに底知れぬ所から出てきて、二人の証人を殺すことが黙示録 11 章に書かれています。そして最後、主が再臨されてから黙示録 20 章には悪魔が底知れぬ所で鎖につながれることが書かれています。そして最後に、永遠の火であるゲヘナの中に、底知れぬ所は投げ込まれます。

今、悪霊どもが懇願しているのは、その幽閉された底知れぬ所に行けと命じませんように、ということ。興味深いことに、悪霊どもは墮落した天使であり、天使は軍隊と同じように権威であり力です。その権威系統には従わなければいけないのであり、イエスの命令によって彼らは従わざるをえないのです。さらに興味深いことは、イエスが来られて、それは初臨でありましたが、すでに終わりの時、再臨の時のイエスの力と主権が臨んだことが分かります。主が現われるということは、そこは終わりの日の現われであるとも言えるのであり、主がおられるところには、つねに終わりの日が意識されるのです。

8:32 ちょうど、山のそのあたりに、おびたしい豚の群れが飼ってあったので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと願った。イエスはそれを許された。8:33 悪霊どもは、その人から出て、豚に入った。すると、豚の群れはいきなりがけを駆け下って湖に入り、おぼれ死んだ。

豚の群れが飼われています。ここから、ゲラサ人の住むところは異邦人の影響の中にあることが分かります。豚は汚れた動物であるとレビ記 11 章で見なされているからです。豚を飼っている者がユダヤ人であるならば、律法を度外視して生きている者たちであったことが分かります。そして、豚に入ろうと悪霊どもがしているのは、彼らは霊であり住むべき体を欲しているということです。人間の霊も同じであり、人の肉体を滅んで神のところに行くとしても、それは裸のままであり、神の家である新しい体が与えられることが、コリント第二 5 章で使徒パウロが論じています。

そして豚が湖に入り、溺れ死にました。死者の行くところ、水の深みに入っていきました。小さな者をつまずかせる者も、碾き臼を首につけられて湖の深みに沈みこまれたほうがましであるとイエス様が言われましたが、そこも同じです。ミカ書の最後に、罪が海の奥底に投げ込まれることをミカが神に願っているところが出てきます。壮絶な霊の戦いです。主が全能の力によって、これら悪霊の勢力を制しておられます。

2B 反応 34-39

8:34 飼っていた者たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や村々でこの事を告げ知らせた。8:35 人々が、この出来事を見に来て、イエスのそばに来たところ、イエスの足もとに、悪霊の去った男が着物を着て、正気に返って、すわっていた。人々は恐ろしくなった。8:36 目撃者たちは、悪霊につかれていた人の救われた次第を、その人々に知らせた。8:37 ゲラサ地方の民衆はみな、すっかりおびえてしまい、イエスに自分たちのところから離れていただきたいと願った。そこで、イエスは舟に乗って帰られた。

イエスが行われたことは、まさに神の国が目で見える形で現れたのですが、これに対してゲラサ地方の者たちは恐れをなしました。神のかたちに造られた、神の目には高価で尊いこの男が、着物を着て、正気に返って座っています。これはまさに、イエスが来られた解放の福音の現れです。「4:18-19 わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。」

ところが彼らにとっては、これが恐ろしいことだったので。悪霊によって救われたことを忌まわしいと思いました。そしてイエスに出て行ってほしいと願っています。これはもちろん、豚を飼っているその不法が、イエスの光によって明らかにされたからです。「悪いことをする者が光を憎み、その

行ないが明るみにされるのを恐れて、光のほうに来ない。(ヨハネ 3:20)「これが暗闇の中に生きる人間の姿です。救われることを望んでおらず、暗闇のいることを愛しています。

8:38 そのとき、悪霊を追い出された人が、お供をしたいとしきりに願ったが、イエスはこう言って彼を帰された。8:39「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。

ここに、すばらしいイエス様と、新たなイエスの弟子とのやり取りがあります。彼は、イエスのお供をしたいと願いました。興味深いことに、この話は願うという言葉がたくさん出てきましたね。レギオンは、底知れぬ所に行くように命じないように、豚の中に入るように願いました。ゲラサ地方の人たちは離れていくように願いました。ここではお供をしたいと願っています。

ところがイエス様は、これほど大きなことを神が行われたことを話して聞かせなさいと言われました。この男にとって、イエス様についての知識がどれほどあったのか分かりません。けれども、イエス様はそのわざを伝えるように言いつけられたのです。そこは異邦人の地方です。イエスは、異邦人に対する働きかけを少しだけ行われましたが、時期尚早でした。初めにユダヤ人の救いのためにイエスは来られたのです。そして、異邦人に対して福音を伝えるのは、ユダヤ人がイエスを拒み、そのことによって異邦人に広がるというのが神のご計画でありました。

しかし種まきをここでイエスは、この男に託しておられるのです。福音の知識としては不十分であって、それで十分でありました。思い出すのは、ある未開の地で福音を伝えた宣教師の話です。ある部族でイエスを信じる者たちが一気に現れました。そして、彼らはもっとイエス様について聞きたいと願いました。宣教師は、「あなたの隣にいるあの部族に、あなたが知ったイエスを伝えなさい。それをしたら、教えてあげよう。」と言いました。その宣教師が決して独りでは行くことのできないところに、信じたばかりのその部族に伝えることを託したのです。このようなことを、イエス様はこの男に行われたのではないかと思います。

2A 病と死 40-56

このようにして、イエスが地においても天においても、いっさいの権威が与えられていることが分かりました。そして次の話も、主の力が大きく働いています。それは、病に対しての力、そして病の先にある死そのものに対する力です。

1B 触る信仰 40-48

8:40 さて、イエスが帰られると、群衆は喜んで迎えた。みなイエスを待ちわびていたからである。
8:41 するとそこに、ヤイロという人が来た。この人は会堂管理者であった。彼はイエスの足もとに

ひれ伏して自分の家に来ていただきたいと願った。8:42 彼には十二歳ぐらいのひとり娘がいて、死にかけていたのである。イエスがお出かけになると、群衆がみもとに押し迫って来た。

イエスが癒しを行われていることについて、ユダヤ人たちは非常に喜んでいました。群衆が押し寄せています。しかし、その中にユダヤ教の指導者がいました。ヤイロです。会堂管理者というのは、単なる建物の管理者ではありません。会堂の管理のみならず、そこで行われる礼拝をも導く人でありました。ですからユダヤ教の霊的な指導者であります。ユダヤ教の指導者は、イエスに対して強い反発を抱いていました。けれどもヤイロは違いました。彼をイエスの足もとにひれ伏させたのは、自分の娘の死に至る病です。神は時に、このようなことがなければ決してイエスのところに来ない人々に、ヤイロのような苦しみを与えられます。自分の立場のゆえに、イエス・キリストご自身に行かなくさせているのなら、自分の生きていることを揺るがすような出来事を許されます。

ここで大事なのは、娘が十二歳であるということです。次に出てくるのは、十二年間長血をわずらっている女です。人生というのは、このようなものです。一つの家庭に、いわゆる「幸せ」が来る時に、もう一つの人生にはいわゆる「不幸」が押し寄せます。私たちは、ある人は幸せで、またある人は不幸せだという区別をしますが、神は差別をされない方です。神はヤイロの家族をも、長血をわずらう女をも、イエスによって救われることを願っておられます。

群衆が押し寄せています。ここのギリシヤ語は、「窒息しそうなぐらいの押し寄せ」だそうです。同じ言葉が、いばらのある土に種が落ちたとえに使われているそうです。「押しふさいでしまった」という言葉です。もし朝の満員電車で、押しつぶされそうになっている時は、イエス様のことを思い浮かべるといいですね、イエス様も同じ経験をされました！

8:43 ときに、十二年の間長血をわずらった女がいた。だれにも直してもらえなかったこの女は、
8:44 イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、たちどころに出血が止まった。

長血をわずらう、ということは、その体の病の重さだけを話しているのではありません。レビ記 15章に書かれていますが、女が血を流すことについて、その期間は不浄であるとみなされます。彼女の触るものはみな汚れてしまいます。ですから、彼女は人々から離れていなければいけません。月のさわりの時にはですから汚れるのですが、彼女のように不正出血をしているのであれば、その間ずっと離れていなければいけなかったのです。これは悲惨です。

さらに彼女は、医者に自分の生活費を全部使い果たしてしまいました。(脚注にそのことが書かれています。)このことも、多くの人が経験しているでしょう。今、受けている病についてそれを直してもらおうと医者から医者へ渡り歩くのですが、かえてお金だけ取られて一向に直りません。し

かし、このこともヤイロと同じように神が、彼女が救われるために用意された道であったのかもしれませんが。彼女に、イエスを信じてこの方のところに来る勇気を与えられました。

そして、彼女は掟破りのことをしました。彼女は、触ってはいけないのです。押し合いへし合いの中、儀式的には彼女は多くの人々を汚れさせていました。けれども、彼女は構わなかったのです。イエスの着ているものの房にさえ触れれば、癒されると思ったのです。福音書に出てくる多くの者たちが、人目など気にせず、そのまま真っすぐイエスのところにくる人が救われるのを書き記しています。そのまま、イエスのところに来るという信仰です。

ところで、この房は、ユダヤ人の男が来ていた、着物の裾に付いているものです。祭司の装束の規定の中に、それが出てきます。女は、それにさえ触れば癒されると思いました。それは迷信めいていると思われるかもしれませんが、けれども神はそのような信仰を尊ばれます。私たちの教会には、愛する尊い兄弟がいます。彼は、教会にまだ通っていなかったころ、イスラエル旅行に行きたい。そしてヨルダン川でバプテスマを受けたいと強く願いました。もちろん、水さえあればバプテスマはどこで受けてもよいのです。ですから、彼の知識は不十分でありましたが、その強い願いによって、彼はそれ以来教会に通い続け、信仰が成長しました。このように、信仰は具体的に働かせることによって、神の力を体験できるようになるのです。

8:45 イエスは、「わたしにさわったのは、だれですか」と言われた。みな自分ではないと言ったので、ペテロは、「先生。この大ぜいの方が、ひしめき合って押しているのです」と言った。8:46 しかし、イエスは、「だれかが、わたしにさわったのです。わたしから力が出て行くのを感じたのだから」と言われた。

「触る」の意味が違います。この女は、信仰をもって触りました。他の群衆は、物理的にはイエスに触っていますが、信仰によって触っていません。同じことをしていても、信仰によるのと、そうでないのとでは全く違います。「ヘブル 11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」

8:47 女は、隠しきれないと知って、震えながら進み出て、御前にひれ伏し、すべての民の前で、イエスにさわったわけと、たちどころにいやされた次第とを話した。8:48 そこで、イエスは彼女に言われた。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して行きなさい。」

女は、すべて隠れて行なおうとしていました。群衆に触って入っていったのですから、これは掟破りです。そして、イエス様との関わりも、ただ着物の房だけを触ろうとする関係でした。しかし今、イエス様に呼ばれて、隠しきれなくなったのです。それで彼女は震えていました。震えながら、全て

のことを話しました。こうしてイエス様は、それぞれの霊的必要性を知っておられます。それぞれに必要なことをご存知です。この女には、自分のしたことを隠さない、信仰を公にする必要がありました。そして、この恐れはゲラサ人の抱いた恐れとは違います。彼女は圧倒的な恵みの中で、自分の闇が明らかにされました。神の恵みを知ることは、自分のありのままの姿を明らかにすることでもあります。これは勇気が要ります。しかし、喜びの中にある恐れです。神への畏敬であります。

そしてイエス様の言葉が、彼女を安心させます。まずイエス様は、「娘よ」と呼ばれています。イエスは、先ほどの悪霊につかれていた男と同じように、社会的には卑しめられている人々に、神から来る尊厳を見ておられます。この女性に対して親愛の思いを込めた「娘よ」と言われているのです。それから、大事なのは「あなたの信仰があなたを直したのです。」という言葉です。イエスはいつも、私たちと共におられます。終わりの日に、今、聖霊によってご自分を臨ませようとされています。その時、私たちに必要なのは信仰です。信じているからこそ、神の力が現れます。

2B 恐れない信仰 49-56

8:49 イエスがまだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人が来て言った。「あなたのお嬢さんはなくなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」8:50 これを聞いて、イエスは答えられた。「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」

イエス様は、忙しい方です。一人の人を助ければ、他に困っている人が助けられなくなります。今、ヤイロの娘が死んでしまいました。しかし、ここに信仰が要ります。イエスは、人々の必要によって限定される方ではありません。そして今、もうひとりの助け主である聖霊によって、イエスはいつでもどこでも助けてくださいます。ヤイロのように、一向に助けが来ないで状況が悪化するように見える時があります。しかし、神は遅れておられないのです。

ヤイロへのイエスの言葉は、「恐れなくて、ただ信じなさい。」です。娘が亡くなったのですから、当然ながら心が乱れます。しかし、イエス様は恐れることをやめるように言われます。信じることと、恐れることは相容れないからです。恐れれば、信じられなくなります。ですから、信じるために恐れを退ける必要があるのです。

8:51 イエスは家に入られたが、ペテロとヨハネとヤコブ、それに子どもの父と母のほかは、だれもいっしょに入ることをお許しにならなかった。

イエス様は、これからの出来事を両親の他は、三人の弟子だけにしかお見せになりませんでした。主はある時には人に言い広めるように命じられますが、ある時にはそれを隠すようにされます。なぜか？主が行われるその意義が、伝えることによってかえって損なわれてしまうからです。イエスが神の御子キリストであることを示し、この方ご自身を通して神をあがめるようにされるのがイエ

ス様の目的です。それを、状況を見て判断され、奇蹟を見てもそのような結果が出てこないと判断されるのであれば、あえて隠すことも行なわれます。

イエス様は交わりを望まれます。しかし、それぞれの理解する能力に応じて、その親密度を変えられます。多くの弟子たちがいましたが、いつも十二弟子たちと時間を過ごされました。そしてその中でも三人のみに、重要な出来事を示されます。ペテロとヨハネ、ヤコブは、このヤイロの娘のいきかえりの他、高い山で変貌された時、さらにゲッセマネの園でご自身に彼らを近づかせました。そういった意味ではすべての人が平等ではないのです。ある者はもっと多くを持ち、またある者は少なく持ちます。

ペテロは、後にイエスがキリストであると告白し、初代教会において指導者となる人物です。ヨハネは、最後まで残る使徒であり、福音書、手紙、そして黙示録を書き記す人物です。さらにヤコブですが、彼はヘロデ・アグリッパ一世によって殺されてしまいます。なぜヤコブにお見せにイエスはされたのか？と思いますが、ヤコブは、殉教する聖徒たちの代表として選ばれたのではないかと思います。殉教して、地上での働きが少なくとも、神はこうした者たちが大きな証しを持つようにしておられます。実に、証しというギリシヤ語は、殉教という意味合いを含むものなのです。

8:52 人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。しかし、イエスは言われた。「泣かなくてもよい。死んだのではない。眠っているのです。」8:53 人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑っていた。

イエスが両親と弟子三人のみだけを家に入らせて、他の者たちが入らないようにさせた大きな理由の一つがここにあります。不信仰なのです。先ほどは、ゲラサ地方の者たちは不信仰によってイエスに去っていくように願いました。次にこの者たちも、不信仰のゆえにイエスの業を見る事ができません。具体的には彼らは、雇われて泣いています。これは当時の習慣で、亡くなった者たちがいかに大切であったかを知らせるために、大きく泣いて嘆くのですが、そのために雇われていた人たちがいました。

イエスの言われた「眠っている」という言葉は、日曜日朝の礼拝で学びましたように、信じる者たちにとっての死の意味を教えています。実際は死んでいるのです。けれども、死で終わらないことを示すために、眠っているという表現を使います。

8:54 しかしイエスは、娘の手を取って、叫んで言われた。「子どもよ。起きなさい。」

「叫んで言われた」とあります。イエスは叫ばれることが多かったです。ラザロを墓から出す時もそうでしたし、生ける水が腹から流れ出てくることを話される時もそうでした。そして終わりの日に

は、大水の音のような声でイエスは語られます(黙示 1:15)。これは単に、娘が立ち上がることを意味しているのではなく、終わりの日に死んでいる者をよみがえらせる意味合いを含めておられるでしょう。イエス様は言われました。「ヨハネ 5:28-29 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」

8:55 すると、娘の霊が戻って、娘はただちに起き上がった。それでイエスは、娘に食事をさせるように言いつけられた。8:56 両親がひどく驚いていると、イエスは、この出来事をだれにも話さないように命じられた。

「霊が戻って」という言葉があります。つまり、死ぬとは霊が体から離れる出来事です。そして、イエスはその肉体に気づかっておられます。死んでいる間、その肉体はもちろん食事を取っていませんから、食べさせて衰弱した肉体を力づける必要があります。

最後に、「この出来事をだれにも話さないように命じられた。」という指導を与えられます。先ほど話したように、この出来事の意味を汲み取ることは、周りの人々にはいないからです。もう一度お話ししますと、イエス様はこの出来事を、もっと大きな神の救いのご計画の中に位置づけているような気がします。ご自身が神の国を立てられること、すなわち再臨によって立てられる神の国も含めてお考えになっていることだと思われます。

先ほどのレギオンが追い出されることも、底知れぬ所という終わりの日に明らかにされる存在が出てきました。そして今、十二歳の女の子がいます。そして十二年長血を患った女がいます。次の章は、これらの大きなイエスの権威を十二使徒たちに任せることを行なわれます。「十二」という数字が続きます。十二は全体を示している、統治を示しています。ここから見えてくることは、あくまでも個人的に見えてくることですが、十二歳のヤイロの娘はユダヤ人の救いに通じるのではないかと思います。そして十二年長血の女は、異邦人の救いに通じます。イエスがユダヤ人を救おうとされるのですが、その前に異邦人の救いが入りました。ユダヤ人は死んだ者のようになってしまいました。エゼキエル書 37 章にある、谷間の干からびた骨のようであります。しかし、主がよみがえらせてくださいます。物理的にも、霊的にも生き返りを与えてくださいます。